日本語と英語の発想と表現の違いについて
―― 夏目漱石の『こころ』とその翻訳作品を用いて ――

98E018　伊保橋　怜　子

1．序論

私は英語の小説を用いて、その小説の言語表現とかかわる様々な要素について分析し、解釈をしてきた。授業では様々な要素について触れたので、「英文の表現を日本語にした場合、どのような表現になるか」など日本語とのかかわりも多かった。そのような分析を続けていくなかで、私は英語と日本語では文章表現の仕方が違うことに気付き、その原因が日本語と英語の発想の違いからくるものであるということを知ったのである。私はますます「発想と表現の違い」に興味をもった。そして、授業で学んできたことを活かし、自分の知っている作品を用いて日本語と英語の比較をやってみたいと考えたのである。日本人作家の作品と英訳されたものでは文章の表現にどれほどの違いが表れるのか。それが知りたくなったのである。

私は夏目漱石の『こころ』を使用した。英語では 'Kokoro' という題名で、Ewin McClellan によって翻訳されている。なぜこの作品を選んだのか。それは私が今まで読んできた本の中で最も印象に残っている作品であり、英訳された作品を読んでみたいと思っていたからである。

私は今まで小説を読む楽しみとは、物語の世界に入り込み自分がその場にいるかのような気分を味わったり、描かれた情景を想像してみたりすることだけだと思っていた。そのため、この考察が小説をもっと楽しむための新たな方法となることを願っている。

2．無生物主語

この本には、日本語では無生物で表現されていなくても、英訳では無生物で表されている表現がいくつかあった。なぜ、そのような違いが生じたのか。その理由を理解するためには、まず、最初に日本語と英語の文章表現の違いがわからなければ始まらない。サイデンスッテッカー・安西の『スタンダード英語講座　第２巻　日本文の翻訳』では無生物主語について次のように述べられている。

> 英語はもともと主語に＜動作主的なもの＞（人間・人間以外のもの）を置く。一方、日本語の場合、＜動作主＞は＜人間＞という原則がまだ忠実に守られているのである。例えば、'What made her do so？' という英文を、「何が彼女をそうさせたか」と訳したらぎこちない翻訳だと感じられてしまうだろう。「なぜ彼女はそうしたのか」という翻訳の方が日本人には自然に感じられるのである。それは上で述べたように、日本が＜動作主＞に＜人間＞を置くからである。これは、『「する」と「なる」の言語学』に基づく。
>
> （1983：42－43）

ここで、『こころ』の中から実際に例をあげて考察してみる。

（1）私にはその答えが謙遜過ぎて却って世間を冷評する様にも聞こえた。(p.30)

（1'）This remark struck me as being too modest, and I wondered whether it did not spring from a contempt of the outside world.(p.22)

（1）の場合、「私」は感情の主体として描かれている。一方、（1'）は「私」の感情を引き起こ

した要素から描いている。ある要素があって初めて感情が引き起こされるのだから、(1') のmeよりもThis remarkの方がより<動作主的>と捉えられたため主語の位置に置かれたのである。そのため、日本語の主語は「私」であるのに対して、英語の主語はThis remarkになったと考えられる。

(2) 私は手もなく、魔の通る前に立って、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気付かずにいたのと同じ事です。(p.180)

(2') The devil had passed before me, so to speak, casting his shadow over me for a moment. And I did not know that his passing had darkened my life for ever. (p.164)

(2) の場合も (1) と同様で「私」は「気付く」という感情の主体である。一方、(2') ではThe devil、his shadow、his passingが「私」の感情を引き起こしたり、「私」に何かを経験させる要素となっている。そのため、his passingが「私」より<動作主的>と捉えられ、主語になったのである。また、(2) は「私」という感覚の主体からの視点で描かれているが、(2') は「私」の感情を引き起こした要素から描いていることがわかる。

このように、(1)、(2) を見ると基本的に日本語は<ことの経験者>、<感覚の主体>や<動作主>に<人間>をもってくる。しかし、(3) の場合<人間以外>のものが<動作主的>に扱われているのである。なぜ、そのようなことが起こるのだろうか。

(3) 然し、其所は年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。(p.71)

(3') I said nothing, however, as I did not wish to seem impertinent. (p.60)

(3) について考察する前に<使役主>の概念について説明する。<使役主>の概念は英語では文構造の中で際立った地位を与えられて表現される傾向があるのに対し、日本では逆にそれを目立たなく表現しようとする顕著な傾向がある。つまり、英語で主格の位置に<使役主>がくると際立ち、日本語では目立たなくなってしまうのである。これらをふまえて (3) を見てみる。(3) では「年長者に対する平生の敬意」が<使役主>の位置になる。この文は目立たせたくない部分なのである。すると、主に表現したい部分は「私が無口になった」という文である。そのため、(3) を忠実に訳すと<使役主>にあたる部分 (ここでは「平生の敬意」) が際立ってしまう。しかし、目立たせたい部分はあくまでも「私が無口になった」という文であるので、Iを主語にしたと考えられるのである。

3. 強調構文 (分裂文)

本を読んでいると、日本語をそのまま英訳してもおかしくないのに、わざわざ強調構文 (分裂文) で表しているところがあることに気付いた。なぜ、そのようなことをするのか。具体例を用いて分析する前に強調構文 (分裂文) の種類と特徴について説明する。福地肇の『談話の構造』では強調構文 (分裂文) について次のように説明している。(1985 : 138 − 154)

強調構文 (分裂文) とは前提内容と焦点内容をある種の文法上の枠の中に押し込めて表す文であり、①Wh-cleftと②*It*-cleftがある。(4) の問いに対する答えとして (5a)と (5b) のような構文がある。

(4) What did John buy?

(5) a. What John bought was a car.

b. It was a car that John bought.

言うまでもなく、(4) の前提はJohn bought xであり、それに答える (5a) と (5b) も (4) と同じ前提をもち、a carを焦点としている。(5a) と (5b) の日本語訳は「ジョンが買ったのは自動車だ」となり区別がつかないが、英文では前提部分と焦点部分が逆の順序で表現されている。つまり、(5a) の前提はWhat John boughtであり (5b) の前提はthat John boughtである。(5a) のような文を①Wh-cleft、(5b) を②*It*-cleftという。それぞれ前提と焦点を同じように分けて表すため、使われ方はよく似ている。しかし、それぞれ異なった特徴があるのである。

ここでそれぞれの特徴について検討してみよう。①は発話の時点で聞き手の意識の中にあると想定される事柄を表す場合に用いられる。一方、②は聞き手の意識の中にない事柄を表す場合でも用いられるのである。

ここで (6) と (7) を見てみる。

(6) 私は私の適視する叔父だの叔母だの、その他の親戚だのを、あたかも人類の代表者の如く考え出しました。(p.164)

(6') It was then that I began to think of my uncle, my aunt, and all the other relatives whom I had come to hate as typical of the entire human race. (p.149)

(6') の場合、that以下の事柄は読み手にとっては新情報である。しかし、語り手にとっては既知の情報なのだ。つまり、ここでは②*It*-cleftが用いられている。②を使用することによって、読み手にthat以下の出来事を前から知っていたような感覚を与えることができるのである。

(7) 私が夕飯に呼び出されたのは、それから三十分ばかり経った後の事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着が脱ぎ棄てられたまま、次の室を乱雑に彩っていました。(p.224)

(7') It was only about half an hour after this that we were called to dinner. As I passed Ojosan's door on my way to the dining room, I saw the ladies' going-out dresses lying in colorful disarray on the floor. (p.208)

この場合も (6) と同様の効果がある。that以下の事柄は読み手にとって新情報である。しかし、②を用いることでまるで知っていたかのような錯覚を起こすのである。

また、強調構文 (分裂文) はIt is (was) の後に来る要素が焦点として際立つという特徴も持つ。そのため、文の焦点を明確にするのに有用な構文なのである。ここで (8) について考えてみる。

(8) しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかったのです。(p.243)

(8') It was a violent emotion that I felt then. (p.225)

(8)で主とするものは「衝動が弱いものではなかった」ことである。しかし、直訳しただけではどの部分が焦点なのかはっきりしない。そのため、②を用いて焦点を明確にしている。

さらに、この場合も (6) と同様に読み手にとっては新情報である。しかし、②を用いることでthat以下の事柄が読み手も以前から知っていたかのような感じを与えているのである。

4. 時制

本を読みすすめて行く中で、日本語と英語の時を表す表現の違いが目についた。その違いはなぜ生じるのか。安西徹雄の『日本文の翻訳』から例ををあげ、日本語と英語の時制に対する考え方の違いについて説明する。(1983 : 18 − 19 、69 − 71)

以下は川端康成の『千羽鶴』の一節。栗本ちか子が、主人公菊治と稲村嬢との見合いの手筈を整えたことを報告している場面である。安西氏は次のように主張している。

（9） さきほど稲村さんにお電話で申し上げますと、母といっしょですかと、お嬢さんがおっしゃいますから、お揃いでいらしていただければなお結構ですと、お願いしたんですけど、お母さんはお差支えで、お嬢さんだけということにしました。

（9'） When I spoke to Miss Inamura over the telephone, she asked if I meant that her mother was to come too. I said it would be still better if we could have the two of them. But there were reasons why the mother couldn' come, and we made it just the girl.

例えば、「お電話で申し上げますと」という部分は一節を読んでわかるように、過去の出来事である。英訳では当然過去形で表されている。しかし、日本語では明白に過去の出来事を述べる場合であっても平気で現在形を使用しているのである。また、それを使用しても全く違和感が生じないのである。それは、日本語が英語にくらべて、時制の扱い方がはるかにルーズであるからなのだ。

英語では原則として現在のことを述べる時は現在時制、過去のことを述べる時には過去時制を対応させ、過去のある時点から見て、さらにそれ以前に起こったことを述べるためには「大過去（過去完了形）」を用いる。しかし、日本語は過去のこと、さらにそれ以前に起こったことを区別して表現する形式がない。また、英語では、文法上の時制は現実の時間の流れに対して客観的に対応している。一方、日本語では、時制は話し手の意識によって支配される主観的な性格が強いのである。日本語のように主観的な性格が強いと、読み手はまるで物語の中にいるような気分になってしまうのである。

これらをふまえて考えると、「お電話で申し上げます」と現在時制で表現されているのは、話し手（作者）が栗本ちか子の視点から描写しその場にいるかのような臨場感を高め、読み手を作中の出来事の現場に引きずり込もうとする意図がうかがえる。一方、I spoke toと過去形で表しているのは、過去の出来事には過去時制をきちんと用いる英語の時制に対する原則があるからである。

ここで本の中から具体的な例をとりあげてみる。

(10) 私は帰った当日から、或いはこんな事になるだろうと思って、心のうちで暗にそれを恐れていた。(p.100)

(10') I had been secretly fearing that such a notion might enter their heads. (p.86)

(10)の場合、「～た」と表されているため、英文でも過去形で表現されると思うかもしれない。しかし、実際（10'）は過去完了形で表されている。それは英語が、基準となる時を決めて出来事を表現し、日本語が過去形と過去完了形の区別なしに表現するためである。(10'）の場合、基準は語り手の現在（事柄を語っている時）である。その基準から眺めると、主人公が「或いはこんな事になるだろう」と思っていたことが現実になった日は過去の出来事になる。「私が帰った当日」はそれよりも前の出来事になる。また、「恐れていた」のは「帰った当日」から恐れていたことが現実になった日（過去）まで続いていた。以上のことから、日本語には過去とそれよりもさらに過去の出来事を区別して表現する方法がないため全て「～た」の形で表すが、英語の場合区別して表現するため過去の出来事よりもさらに過去の事柄を表現できる過去完了形

が用いられたと考えられる。

(11) ところが帰ってみると叔父の態度が違っています。(p.153)

(11') My uncle's attitude towards me, however, had changed. (p.138)

ここでの基準は (10) と同じように語り手の現在である。そうすると (11) は「〜いました」と表現されるほうが自然ではないかと考える。しかし、実際は「〜ています」と表されているのである。なぜ、現在形で表されるのだろうか。

これは、小説などを書くときに用いる技法のひとつなのだ。この技法を用いることで本当ならば過去の出来事だが、現在形で表現することで、まるで自分がその場にいるかのように読み手に感じさせることが可能になるのである。

さらに、「〜ている」という言葉を動詞につけることによって、進行相（動作の継続を表す）と結果相（動作が完了した結果として生ずる状態を表す）を指示する。それを、英語で表現しようとすれば進行形か完了形で表すことになる。ここでは、先生 (me) が帰ってくる前にあった出来事の結果、叔父の態度が変化したと考えられ、結果相が用いられたのである。そのため、(11') は過去完了形で表されているのである。

もうひとつ例を見る。

(12) Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事に就いて、私が取り合わなかったのを、快く思っていなかったのです。(p.208)

(12') I discovered that he had resented my back of interest in his comments on Nichiren the day before. (p.192)

(12)の場合、私（先生）が遺書を書いている時を基準にしている。そのため、(12) は「私が取り合わなかった」、「快く思っていなかった」と過去の時制で表されている。しかし、(12') では過去形と過去完了形で表されている。このような違いが生じるのは、(10) でも述べたように日本語には過去と過去よりももっと前の出来事を表す表現方法（英語ならば過去完了形）が存在しないからである。つまり、文章を読めばどちらの出来事が先に起こったかはわかるが、(12) に比べて (12') は、どちらが先に起こった出来事なのかを明確に判断できるのである。これが英語の特徴なのだ。ここでもし、物語の中が基準（現在）であれば私（先生）が気付いた時が「現在」になり、それより前からずっとKが「快く思っていなかった」ことは基準になる時まで続いているので現在完了形で表すことができる。しかし、ここでの基準はあくまでも遺書を書いている時点である。そのため、私（先生）が気付いた時は過去形、Kが快く思っていなかった時は過去完了形で表現されたのである。

5．名詞句

ここでは日本語特有の語句を英訳する場合の語彙の違いをとりあげるが、具体的な例に入る前に、日本的風物や日本的言いまわしの翻訳について巻下吉夫・瀬戸賢一の『文化と発想とレトリック』から引用し、考察する。(1997：85－88)

(13) a．そうして振り返って、襖に迸ばしっている血潮を初めて見たのです。

b．...,and turning back, I saw for the first time on the sliding-door the blood that had burst forth from K's body.

c．Then I looked around, and for the first time, I saw the blood on the wall.

(14) a．事務系のサラリーマンというのは手に職がないのと同じでつぶしが利かないのである。

b. A clerical worker was as good as unskilled.

(13) や (14) のように日本的風物や日本的言いまわしを英訳する場合、特別の場合を除いて、記述が簡素化されるのが普通である。英訳の際に削除されたり、通常語句で言い替えられたりされるのである。なぜ、そのようにされるのか。それは、一般の英語読者を対象にする場合、異文化に深入りしても興味を引かないことも多く、また誤解を招くこともあるからである。

(13b) は近藤いね子訳、(13c) はE.McClellan訳の文章である。同じ文章を訳したのに (13c) の訳のほうが簡明で力強い文章と言える。この違いは英語話者の翻訳観からくるものである。英語話者の翻訳観とは「簡潔な文章を評価し、原文の文化を読者に押し付けないこと、センテンスの山を際立たせる配慮が必要である」ということだ。そのため、(13c) は日本の習慣の分からない一般読者のために「襖」をwallに変えたり、文章を簡潔に表現している。(13b) のように「襖」をsliding-doorと訳してもいいが、この重要なセンテンスの一番最後の言葉として響きがよくないし、むしろ血潮のつくはずがないガラス戸を想像させる恐れがある。Paper sliding-doorは長すぎて文章の邪魔になるし、ほとばしっている血潮から読者の注意をそらせてしまうだけなのである。

(14) の「つぶしが利かない」という表現は日本人でさえも正確な意味を知らないのではないだろうか。これは「本来の仕事をやめても、別な仕事をやりこなす能力がない」という意味がある。しかし、意味を忠実に表現しようとすれば説明的になってしまい、英語話者の翻訳観に反する。ここで言いたいことは「事務系のサラリーマンは別の仕事をやる能力がない」ということなので、文章を簡潔にして (14) のような表現になったのだと考えられる。

以上のことをふまえて実際に例をあげて考察してみる。

(15) 「どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定っていう位だから」(p.89)

(15') "I shall tell myself that 'death comes to old and young alike,' as the saying goes."

(16) その上こういう遊戯を遣り付けないKは、まるで懐手をしている人と同様でした。(p.218)

(16') K, who was unused to such lighthearted pastimes, sat like a block of wood. (p.201)

(15) や (16) の「老少不定」という言葉や「懐手」という言葉を一般の英語読者は知らない。だからといって、これらがもつ意味をそのまま英訳しても長すぎて文章の邪魔になってしまう。そこで、death comes to old and young alikeやsat like a block of woodという表現で表し、英語読者が理解しやすいように言い替えているのである。

(17) 彼は手頸に数珠を懸けていました。(p.183)

(17') He was wearing a rosary around his wrist. (p.167)

また、(17) の場合、「数珠」という言葉も一般の英語読者は知らない。数珠の意味をそのまま英訳に表すこともできない。(15) や (16) のように数珠がどんなものか説明するようなかたちになってしまい、文章の邪魔になるのだ。そのようなことを避けるために、数珠と同じようなはたらきを持ち、同時に英語読者になじみのあるrosaryを用いて読者の理解を得ているのである。

次に、日本語では同じ表現をしていても、英語では別々の言葉で表されている例をあげる。(18)、(19) を含む場面は、具合が悪くなった私 (主人公) の父の様子とその周りの人々の様子についての描写したものである。この描写はしばらく続くのだが、その中で日本語の場合、私

（主人公）の父親を表す表現は「父」と「病人」だけである。父親が主語だと表現されていないところもある。一方、英語では日本語の通りに表現されているところもあるが、(18') や (19') のように日本語とは対応しない言葉で表されているところもあるのである。なぜそのような違いが出てしまうのか。それは、日本語と英語の名詞表現に対する考え方の違いと、先行文脈とのかかわりが問題になってくる。違いとは日本語は同じ単語をくり返しもちいることを気にしないが、英語はくり返しを嫌う傾向があるということである。これらをふまえて(18)を見てみる。

(18)　病人は嬉しそうな顔をした。(p.126)

(18') My father looked pleased. (p.112)

(18) の場合、「病人」がMy fatherと表されている。これは、この場面で「病人」が示す人物は私（主人公）の父であるからである。これは先行文脈から判断できる。また、この場面で重要なのは「病気の父（主人公の）の様子」であって、一般的に言われる「病人」(病気の人）の様子ではない。もし、patientと表したら読み手に「病気にかかっている主人公の父」という印象よりも、「一般的な病気の人」の印象を強く与えてしまい、常に「病人」という意識をもって話しを読み進めていってしまう。すると、物語の中で重要な部分があったとしてもそれを見落としてしまう恐れがあるのである。それらの理由から (18) の「病人」はMy fatherと表現されたと考えられる。

さて、(19) はどうだろうか。

(19)　枕辺を取り巻いている人は無言のまましばらく病人の様子を見詰めていた。(p.134)

(19') In silence, the people sitting around the dying man watched him for a while. (p.120)

(19) では、「枕辺を取り巻いている人」とは誰の枕辺なのかを表していない。それは、日本語の「主語がなくても文章を作ることができる」という特徴からきている。しかし、英語ではそうはいかない。上でも述べたが、英語は文章をつくる際、主語を明確にし、同じ言葉を繰り返さないのである。(19) に言葉を補うならば「父」や「病人」などが補える。そうすると、(19') では私（主人公）の父を示す表現が2つ必要になる。しかし、(19') よりも前の部分でmy fatherという言葉が頻繁に出ているので別な表現を用いるしかない。そのため、(19') ではthe dying manという言葉を使用したのである。そして、その後にくる「病人」という言葉を、the dying manをうけて代名詞のhimに置きかえたのだと考えられる。また、ここでthe dying manを用いた理由がもう1つある。それは、「私（主人公）の父が病気で、もう死にそうである」ということをもう一度読み手に認識させるためである。私（主人公）の父の描写は長いため、話しを読んでいく中で次第に「主人公の父が病気で死にそうである」という意識が読者の中から薄れていってしまう。(19') の場合も、それ以前の文章ではmy fatherやhimばかりが使われているので、自然と「主人公の父が病気で死にそうである」という意識が薄れてしまう恐れがでてくる。それを防ぐために、「死にそうである」というイメージをしやすいthe dying manを用いたのではないだろうか。

次に (18)、(19) と同様に日本語では同じ言葉で表現しているのに、英語ではそれぞれが別の言葉で表現されている例をあげる。

(20)　私は未亡人にあって来意を告げました。(p.161)

(20') I introduced myself to the widow. (p.146)

(21)　未亡人は正しい人でした。又判然とした人でした。(p.161)

(21') The lady had an honest and direct manner. (p.146)
(20)、(21) で「未亡人」と表されているが、(20')、(21')ではそれぞれthe widow、the ladyと別々の単語で表現されている。なぜ、そのようなことがおこるのだろうか。それは、(18)、(19) でも述べたように、日本語は同じ単語をくり返しもちいることを気にしないが、英語はくり返しを嫌うという特徴が原因である。ここで(20)、(21) を見てみると、(20)、(21)の文章が出てくる前は私（先生）が下宿させてもらえるかどうかある家に挨拶をしに行くという場面が描かれている。すると、この後に家主が登場するのが自然である。しかし、読み手は家主がどのような人物なのかわからない。読み手にも家主の人物像をわかるようにするには、多くの情報を読み手に与えなければならないのである。ここでthe widowとthe ladyを比較した時どちらの単語がより多くの情報を持っているだろうか。答えはthe widowのほうである。the widowは「未亡人」という意味がある。未亡人には「夫に死なれていること・女性であること・結婚していたこと」という様々な情報がある。一方、the ladyの意味は「女性」であり、その他の情報はない。(20') では読み手に多くの情報を与える必要があったのでthe widowを用いたのである。(21') の場合、(20) のようにくり返しthe widowを使用すると情報量が多いので、どうしてもthe widowを意識してしまう。しかし、この部分で主張したいのは未亡人の性格であるため、情報量の少ないthe ladyを用いたと考えられるのである。

6．結論

私は、序論でも述べたように、日本語と英語ではどれほど表現の違いがあるのか、その原因は何かを知ろうと本を読み始めた。本を読みすすめて行く中で、私は新たな発見と驚きの連続だった。私の予想を上回る数の違いが存在したのである。しかし、私の「表現の違いに対する関心」は薄れるどころか高まるいっぽうであった。まず、私は無生物主語をとりあげた。無生物主語については学校で学んだ知識もあったので、すんなりと問題に取り組むことができた。次に強調構文（分裂文）に興味をもった。ここでは、私が今まで学んできた構文の特徴とは違う、新たな特徴を知った。そして、英訳の際、強調構文を用いる理由が明らかになった。時制では、「誰の視点をとるかによって変わる時制」、「ルーズな日本語の時間表現」など、今まで気付かなかった部分を知ることができた。最後にとりあげた語彙の違いでは、日本語話者が翻訳した作品を日本人が読めば理解できるが、日本語のわからない英語話者がその作品を読んでも理解できない部分が生じたり、物語の内容そのものを楽しめなくなる恐れがでてくるということを知った。それを防ぐため、英語話者は原文の文化を読者に押し付けない簡潔な文章に翻訳そうとするという英語話者の翻訳観をも学んだ。

このように、私は様々な考察を通して、英語話者の翻訳観を学ぶことができ、私がもつ英文法の知識も増え、益々英語に対する関心が高まった。そして、何よりもこの考察が「小説を楽しむための新たな方法」となったことに喜びを感じているのである。

参考文献

福地肇. 1985『新英文法選書10 談話の構造』大修館書店.

池上嘉彦. 1981『「する」と「なる」の言語学―言語と文化のタイポロジーへの試論―』大修館書店.

國廣哲弥. 1980『日英語比較講座　第2巻　文法』大修館書店.

巻下吉夫・瀬戸賢一. 1997『日英比較選書1 文化と発想とレトリック』研究社出版.

松村明・山口明穂・和田利政. 1960『国語辞典』旺文社.

三浦つとむ. 1975『日本語の文法』勁草書房.

村田勇三郎・成田圭市. 1996『テイクオフ英語学シリーズ2 英語の文法』大修館書店.

大江三郎. 1982『講座・学校英文法の基礎　第四巻　動詞（Ⅰ）』研究社出版.

サイデンステッカー, エドワード G.・安西徹雄. 1983『スタンダード英語講座　第2巻　日本文の翻訳』大修館書店.

テキスト

夏目漱石. 1952『こころ』新潮社.

McClellan, Ewin. 1957. *Kokoro*. Tuttle Publishing.

A Comparative Study of the Ways of Thinking and the Languages
—— Soseki Natsume's *Kokoro* and Its English Translation ——

< Abstract >

In my thesis, I examined "ways of thinking and their expressions in English and Japanese" which I studied in the class. I decided to compare a Japanese novel and its English translation, and I used *Kokoro*, written by Soseki Natsume. I expected not only to enjoy the contents of the story, but to enjoy it from a new viewpoint. There were a variety of differences in this book, and my volition was raised.

In section 2, I took up inanimate subjects. Japanese tends to use intransitive expressions like "the event happens" or "the situation exists" with an animate experiencer or conceiver. On the other hand, English tends to use transitive expressions with an agent or causer subject. For example, although Japanese expressions start in many cases with the subject "I", in English, "the element which had some influences on me" is chosen as the subject. I also examined the effect of the use of an inanimate subject in Japanese.

In section 3, I studied cleft sentences. English has two types of cleft sentences ; that is, "Wh-clefts" and "*It*-clefts." They are different in whether the speaker assumes that the hearer knows or is conscious of the content of the presupposion clause. Cleft sentences are used to convey information effectively.

In section 4, the difference in the temporal expressions of English and Japanese was considered. Although tense is decided on the basis of the person who takes a viewpoint in English, in Japanese there was the feature of not necessarily becoming like English. *Kokoro* is written from the viewpoint of the narrator "I", and the content is all about the past. Therefore, usually the past tense and the past-perfect-form are used. However, in English translation, even if expressed with the past-perfect form, there is also a portion expressed in Japanese by the present form. It is caused when there is technique which gives presence as if it needed the reader in the novel. Furthermore, tense is not applied strictly to Japanese.

In section 5, I examined translation of noun phrases. A brief translation is preferable to literal, long one. When English does not have the exact expression which corresponds to Japanese, long explanatory expressions are not necessarily used, but the expressions which have similar and familiar meaning are used.

（卒業論文指導教員　上野恵美子）